

<3ページから続きます>

「うちの教会ではこうですから」と紙一枚渡して終わりとか、逆に「おっしゃるとおりですね」とパッと変えてしまえるなら楽でしょうけれども、そうはせずに、あえて手間をかける。「神学する」とはまさにこの手間、プロセスそのものです。

このように教会が「神学する」ことを大事にするための試みの一つとして、宣研が長年取り組んできたものに「式文」作成プロジェクトがあります。「式文」とは、例えば主日礼拝の式次第のように、教会で行う様々な式に関して、それを定めたものです。教派によっては「祈祷書」ですね。この式、この場面ではどう祈るべきか、というよ

うな。でも、それを拒否したのがバプテストなのに、なぜわざわざ「式はこういうふうにしなさい」というようなものを作るのか、矛盾じゃないかと言われると思うし、言われなくて困るのです。「連盟の諸教会は、これからは全て宣研が作る式文に則って式を行ってください」などということになったら、今まで話してきたバプテストのアイデンティティはどこに行ってしまったのか！ということになりますから。それでもあえて今、宣研がこれをするのは、それを「たたき台」として、皆さんが教会で「神学する」その道具として使っていただきたいからなのです。

注1：この原稿は2015年1月24日開催「きたかん壮年会研修会」での講演記録を大幅に加筆・修正したものです。

<役員会よりお詫び>

本シリーズ第1回（2015年5月1日発行）において掲載しました文中の牧師早期離任に関する記載について、執筆者の本意を正しく共有できていない事象があることを確認し、執筆者である松見享子先生より以下のコメントをいただきました。執筆者にご迷惑をおかけしたことを心からお詫びいたします。

86号でご紹介した牧師の離任に関するデータが、誤った数値や本来の文脈を無視した形で、複数の公の会議の席上で引用されていることを大変遺憾に思っています。今回のデータは、あくまでも一人でも多くの牧師が教会員との心の通じ合う良い環境の中で、継続してその働きを担えるように、辞任理由の全てを牧師に帰すのではなく、その背後にある様々な要因も考慮しながら教会にも一緒に考えていただきたいという趣旨でご紹介したものであることをご理解、ご留意いただけましたら幸いです。（宣教研究所・松見享子）

2015年11月現在の神学生奨学金献金・会費実績および対前年度比較

地方連合名	神学生奨学金献金					連合会費				
	2015/11実績		前年同月		対前年額	2015/11実績		前年同月		対前年額
	金額	教会	金額	教会		金額	教会	金額	教会	
北海道	225,760	11	341,392	9	-115,632	82,500	7	55,500	5	27,000
東北	626,297	10	571,848	14	54,449	69,000	8	65,000	8	4,000
北関東	1,394,327	15	1,305,215	14	89,112	115,500	9	211,500	7	-96,000
東京	2,241,499	26	2,158,725	23	82,774	226,500	15	237,000	11	-10,500
神奈川	1,132,005	11	1,802,748	12	-670,743	157,500	8	196,500	8	-39,000
西関東	347,950	7	455,800	7	-107,850	57,000	6	57,000	5	0
中部	343,805	6	701,635	8	-357,830	13,500	1	0	1	13,500
関西	643,471	16	641,182	16	2,289	75,000	7	82,500	5	-7,500
中四国	666,770	14	690,720	14	-23,950	52,500	7	105,000	8	-52,500
北九州	632,500	10	700,760	14	-68,260	97,500	6	97,500	6	0
福岡	1,948,193	29	1,781,733	25	166,460	189,000	15	183,000	16	6,000
西九州	770,500	8	800,637	9	-30,137	42,000	4	36,000	4	6,000
南九州	628,893	15	623,773	12	5,120	75,000	7	139,500	8	-64,500
個人団体等	454,167	0	398,940		55,227					
総計	12,056,137	178	12,975,108	177	-918,971	1,252,500	100	1,466,000	92	-213,500
対前年比	93.0%	100.0%				85.0%	108.0%			

◎11月末現在、献金、会費ともに前年同月を下回っています。（対前年度比で献金が93%（約92万）、会費が85.0%（約22万）です）ぜひお祈りに加えていただき献金増加と共に、充実した連合活動のために連合会費へのご協力をお願いいたします。

<第2回奨学金委員会報告>

開催：2015年11月14日（土） 於）連盟事務所

- 西南学院大学神学部より卒業予定者7名（大学院3名、専攻科1名、選科1名、学部2名）の動静について説明を受ける。この時点で4名は招聘先と調整中、他の3名は大学院進学希望と招聘先が決定。
- 10月24日西南学院大学にて2016年度転入・編入学生との面談を実施した。
- 2016年度貸与奨学金申請者（在学生分）の審査を実施し、13名の申請者を認定した。

日本バプテスト連盟全国壮年会連合 〒336-0017 さいたま市南区南浦和1-2-4
事務局執務時間：月、水、金 10:00～16:00
☎・fax:048-886-7533 http://www.sonnen.net sonnen@bapren.jp

伝道者養成 & 教会形成

全国壮年会連合 NEWS

第89号
2015年12月15日
発行

日本バプテスト連盟
全国壮年会連合
発行人：大城戸一彦
編集人：井伊肇
Topics password▶sorengo

神学校献金(神学生奨学金献金)

郵便振替 00150-7-669605 日本バプテスト連盟 全国壮年会連合事務局

神の言が臨んだ

九州バプテスト神学校校長 和白バプテスト教会牧師 城前和徳



クリスマスおめでとうございます。

九州バプテスト神学校は、諸教会・伝道所の皆様の熱い祈りとご支援に支えられながら、教会と共に、主に仕える神学校としての歩みを続けさせていただいていますことを感謝申し上げます。

主の降誕に関する記事の中に、「神の言が荒野でザカリヤの子ヨハネに臨んだ」（ルカ福音書3章2節）との御言が記されています。孤独なる人間が神の介入を受けて、新しい使命に歩もうとする様子が描写されています。「臨んだ」とは、「来た」「生まれた」「立った」という意味があり、神の言によって新しくされ、新しい使命に向かって歩もうとする在りかたの多様性を示しています。それも「荒野で」という人間にとって苦難と試練の只中で、神の介入の意味が伝えられているのです。私は、この主の降誕を迎える度に、この御言に自らの名前をいれて「神の言が荒野で城前和徳に臨んだ」と読んで、自らの信仰を再確認し、主に従う器とされた者として、原点に立ち返ることを示された時として受け入れ、新しい年に向かっての再出発とさせていただいております。

主イエス誕生の際に、両親となった「マリヤとヨセフ」も、自分たちの存在の中に、神の介入を受けることには、その使命を果たすことはできませんでした。まさに、人生の途上において、神の介入を受けることによって、新しくされ、新しい歩みをする事ができたのです。私たちクリスマスを迎えるとき、主イエスの御降誕の事実と現実に耳を傾けつつ、この時代に御言を伝える器として、「神の言が臨んだ」ことをあらたに覚えたいものです。神学校で御言を伝える器としての学びをしている神学生一人ひとりと講師も、自らに「神の言が臨んだ」事実を受け入れて、研鑽の時を過ごしております。

九州バプテスト神学校の基本方針は、「キリストのからだ」なる教会に仕える積極性と成人性(成熟性)を備える人材の育成に努めていきたいとの祈りを受けて、共に教会の現場を中心とした神学の学びを通して、教会を建て上げていく姿勢、感性を養う人材育成に努めております。特に、神学生一人ひとりは献身の自覚と教会の祈りによって派遣された公的存在であることを覚えて学んでおります。それゆえに、諸教会との対話を大切に、より教会に密着した「キリストのからだ」なる教会に仕える器として、御言に聴きつつ、学びを深くしていきたく祈っております。今年はこの祈りに支えられて、カリキュラムの充実は勿論のこと、毎年開催されるスクーリング(3泊4日)において、2015年は「教会とは」-主告白に生きる-とのテーマのもと、神学生と講師が寝泊りを一緒にしての神学の研鑽と交わりを大切にしております。宣教センターの働きとして、「教会形成協議会」(牧師と信徒の協働)を1月10日～11日に実施し、福音宣教の使命のために、牧師と信徒が協働して教会形成を担うあり方を研鑽します。また、今年初めての試みである「リカレント」、すなわち、プロフェッショナルとしてのスキルアップを目指して、現場の牧師、主事、教会役員、神学生等の方々を対象に、2月1日～3日の日程で開催します。講師に寺園喜基先生、小林洋一先生をお迎えして、「地上を旅する神の民」をテーマに学びのときを持ちます。

九州バプテスト神学校は、「働きながら学べる学校」です。特に壮年の方々の献身を祈っております。インターネット、DVDによる通信制もありますので、ぜひ九州バプテスト神学校で学んでくださいますようお願いしております。

一神学生 証し「インマヌエルなる主に信頼して」

西南学院大学神学部専攻科 米本裕見子（南名古屋キリスト教会推薦）

平和の主、イエス様のご降誕をお喜び申し上げます。

西南学院大学神学部で最後のアドベントを迎えました。三年間、全国壮年会連合の皆様の尊いお祈りとお捧げものによって学びが守られてきました。心から感謝申し上げます。

13年前にイエス・キリストと出会い南名古屋教会に連なりアップダウンしながらも信仰が育まれ、東日本大震災とある老牧師との出会いを機に直接献身に至りました。解放と救いの神、主イエスを証していきたいという思いでした。

そして入学以来、沢山の出会いと交わりを通し神の愛と恵みを頂いてきました。他方、こちらにも恵みですが課題、論文、行事、教会奉仕等で余裕のない毎日です。また寮生活は、「共に生きる」ことを学ぶ訓練の場です。絶対化を退け、素直に神、自分、隣人、出来事に向き合うよう迫られます。日々、自分の力だけでは立ちゆかない所へ追い込まれ、不安に覆われることもあります。そんな時、「恐れるな、私が共にいる」の言葉が響き、本当に多くの方々のお祈りに支えられていることを思います。毎日の生活が神学の実践の場となり、神学が問いかけてきます一神を神としているか、神を信頼しているか、神と人と共に仕え生

きるとは一問われ続けることが福音に生きることなのだと思います。

新年度から女性連合での働きが与えられます。心から感謝します。機関紙「世の光」、世界伝道、後継者育成、沖縄、被災地支援など、教えて頂きながら取り組んで参ります。バプテストの群れにある教会が主にあって性を超えて連帯し神にある同労者として歩めることを喜びつつ。また、バプテストの三つの神学校を覚え、一緒に祈りを合わせていきたいと思っています。何卒よろしくお祈りします。

全国壮年会連合のお働きの上に豊かな祝福がありますようにお祈りしています。

**天が地を高く超えているように
わたしの道は、あなたたちの道は
わたしの思いは**

あなたたちの思いを、高く超えている。

（イザヤ55:9）

写真は、2015年9月に参加した、ミッション・ボランティア・スタディ・ツアーでルワンダの子どもたちと交流する米本裕見子さん



一神学校献金（神学生奨学金献金）活動一 西九州地方連合壮年会の活動について

神学校献金推進委員 桑原 伸良（長崎バプテスト教会）



神学校献金推進員としてこれまでの活動を反省し、これからの取り組みを考えてみます。

西九州地方連合壮年会は、13の教会・伝道所からなっています。壮年会の活動が本格的に行われたのは、1998年8月、第33回全国壮年大会を西九州が担当する為の準備からと記憶しています。1年前から、各教会から実行委員を選び、月に1回嬉野教会に集まり会議をいたしました。各教会の現状報告、情報交換など、活発な交わりを行いました。そのような活動を通し現在の西九州地方連合壮年会があります。

現在の壮年会の柱は、神学校献金の推進です。各教会には様々な事情、温度差があります、しかし私たち壮年が神学生への奨学金を支えているのだという思いは同じだと信じ活動を行っています。まずは、神学校献金“0”の教会をなくすことです。

ここに長崎教会の取り組みをご紹介します。ひ

とつは、礼拝の奉仕です。神学校週間期間中、DVDを使っての神学校の紹介、宣教、賛美などを行っています。又、年間に6回昼食の当番を行っています。カレーが主なメニューですが、ソーメン、豚丼など目先を変える様にしています。この準備と後片付けが、交わりの場となっています。このような、壮年一人ひとりの奉仕の積み重ねが、神学校献金の一部になっているのだと信じています。

これからの西九州壮年会を考える時、第一に各教会の神学校献金に対する温度差をなくすことです。そのためには、霊交会など西九州地方連合の集まりを通し各教会とのコミュニケーションを図りたいと思います。

現在西九州地方連合の諸教会から、5名の方が、九州バプテスト神学校で学ばれています。これからもこれらの方々が続いて神学校で学ばれる方が与えられることを祈り、奉仕を続けていきたいと存じます。

「バプテストにおける伝道者養成」その4（注1）

日本バプテスト連盟宣教研究所非常勤所員・恵泉バプテスト教会協力牧師 松見享子

教会内で当たり前のように使っている言葉やプログラム、ふるまいを見直してみること、これも教会が「神学する」ことにつながります。今の多くの教会は、その教会を立てあげた世代から、少し下の方々に引き継がれていると思います。最初の方々というのは、この日本でバプテスト教会を一から形作ったのですから、バプテストにふさわしい礼拝のあり方とは何か、例えば礼拝の中での用語の使い方、それこそガウンを着るべきか脱ぐべきか、というような議論の一つひとつを重ね、そうして今私たちが引き継いでいる形があるわけです。けれども、その形や結果は知っていても、そこに至った過程は知らないということはいくつではないでしょうか。なぜ教会の総会を開くのか、なぜこういう組織図になっているのか、そこには先人たちがそれによって表そうとしたバプテストの信仰の本質、神学があるはずで、今ある形は、その時点では最もふさわしいと選び取られてきた形なのでしょう。でも、もしかしたら今の状況には合っていないかもしれない。そうすると、その形が出来た背景や信仰の本質の部分など、積み上げられてきたものをきちんと理解した上で、変えてはならない本質を表すためにもっと良い形があるのなら、そこは柔軟に変えていくということも起こり得るでしょう。もちろん結果的に何も変えないことを選びとった場合でも、そうした確認や共有が教会全体でなされた、そのプロセス自体が、その後の教会形成にとって大きな意味を持つはずで

あるいは神やイエス・キリストや愛…、そんな信仰を言い表す根本的な言葉から、伝道や宣教のように、教会の働きを表す言葉まで、教会内で使っている言葉がありますね。でも、いざその中身や意味するところを教会員に聞くと各々違う理解をしているということもあります。例えばひとことで伝道といっても、ある人は聖書を直接的に伝えることを指しているし、ある人は教会の外で行う社会的な働きも含めて伝道なんだと捉えます。社会的な働きも大事にするけれど、それ自体は伝道の副産物的なものとして捉える人もいます。それじゃあ、今私たちの教会では何を選び取っていくべきだろうとみんなで考えてみる。これもまさに「神学する」ことです。

私が協力牧師をしている恵泉教会で、最近課題になったのは主の晩餐式です。「クローズド」とか「オープン」という言葉を聞いたことがありませんよね。恵泉教会の主の晩餐式は、いわゆる「セ

ミオープン」になるのでしょうか。毎月月初の主日礼拝の中で、教会員、他教会員を問わず、既にクリスチャンとして信仰生活を歩んでいる方、そして、その場で主の招きに応じて、近々信仰告白をしてクリスチャンになるという決心をされた方が主の晩餐式に与ります。その他の方は待っていてくださいということで、パンとブドウ酒を配りますが、その時は取る人は立って、取らない人は座っています。ある時教会員が求道者の方から、「あれが嫌で主の晩餐式があるときは礼拝に行きたくない」と聞いたわけです。その教会員は「本当にそうだ、気の毒だ」と、同じように感じた他の教会員数人と連名で牧師・執事会に質問状を出してこられました。「自分たちには、それが排他的で愛のない行為だと思えるので考えて欲しい」と。ここで牧師や執事たちが「いやいや、これが恵泉教会の決まりですから」と言って終わったら対話にならない。むしろ、これは良い機会だなど私自身は思いました。というのも、その時まで私は、求道者の方とはともかく教会員は「なんで主の晩餐式をそういう形でやっているのか」を共有しているものだと思っていたのです。でも、求道者から「これは嫌だ」という意見が出たときに、「これはあなたを排除することではないのです」と、「私たちにとっては、もう一度十字架の死と復活の恵みを思い起こして、その前に悔い改めるということの表明の場所なので、ぜひそのことを一緒に見てほしい」と、そして「その場には、あなたももちろん招かれているのです」という説明がされなかった。「私たちは立っているのにあの人は座っているのは気の毒だ」となったのは、私たちが無意識に「主の晩餐に与っている人たちは当然そのつもりでやっているはずだ」と思っていたことが、実は教会員の中でさえ共有されていなかったということですね。だから、これはもう一度みんなで、私たちの教会にとっての「主の晩餐式」の意味を考える良い機会だなど思いました。連盟の加盟教会の中にも、教会員限定で主の晩餐式を行う教会もあれば、教会員、クリスチャンを問わず、礼拝に出席している全員で与る教会もありますが、各々に神学的根拠があるのです。ですので、それぞれの背景ですね。同じ聖書を読んでいて、なぜそういう違いがあり得るのかということ学んだ上で、じゃあ、私たちは今、どういうあり方を選び取ることが、私たちが告白しようとしているキリストの福音を最も表すことになるのかを一緒に考えていく機会になればいいと思っています。 ☞<4ページにつづきます>